

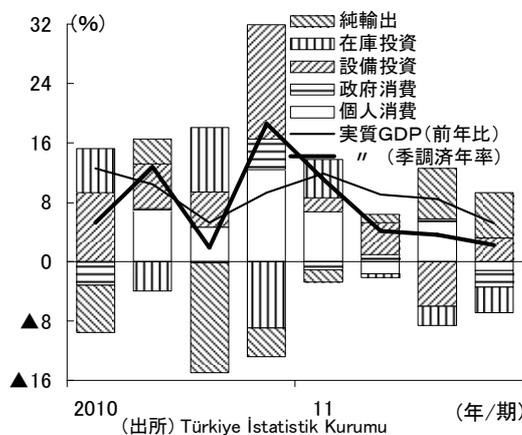


## 本年入り後、反転回復するトルコ経済

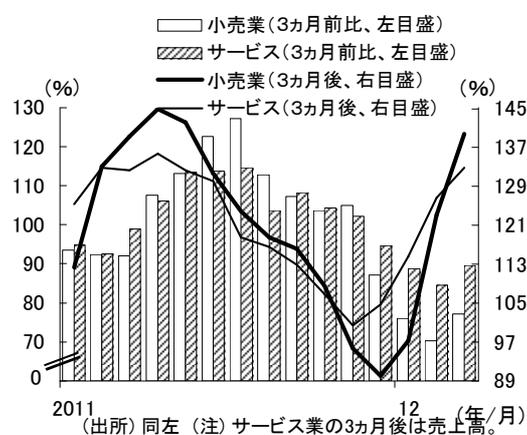
～ 欧州危機の下押し影響が後退へ ～

- (1) トルコ経済は昨年10～12月期、前年比で実質5.2%の低成長(図表1)。昨年1～3月期同11.9%、4～6月期9.1%、7～9月期8.4%から様変わり。季節調整を施してみると、急激な失速は昨年4～6月期以降。同期以降の前期比年率成長率は順に4.2%、3.6%、2.3%。主因は内需の2本柱である消費と投資の低迷。在庫圧縮の動きが拮がるなか、輸入が減少し外需はプラスに。2010～11年の8～9%成長は一時的であり、本年は4%前後の低成長との見方も台頭。
- (2) しかし、昨年末以降、景気は失速から回復に転換した可能性。内需との連動性が強い小売業とサービス業について企業の業況判断をみると、潮目に変化(図表2)。まず3ヵ月前と現状とを対比した判断系列をみると、小売業、サービス業とも昨年7月をピークに急速に悪化した後、本年2月をボトムに回復。さらに現状と3ヵ月後を対比する判断系列では、昨年4月をピークに悪化した後、サービス業は昨年11月、小売業は12月を底に急回復。本年3月にはほぼ既往最高水準へ。
- (3) 経済全体の動きを示唆する電力消費量を総じてみると、まず10年春以降、リーマン・ショックの反動で急増した後、11年春から増勢が鈍化して一進一退となったものの、11年末から再び増勢を回復(図表3)。自動車生産台数は10年末をピークに昨年は年間を通じて軟調で推移。しかし、本年2月、増勢転換の兆し。原動力は輸出向け。同国経済は昨年、欧州危機に直撃され、失速を余儀なくされたものの、ギリシャなど各国財政問題に一応の目途が付かなか下押し圧力が後退。消費者・企業マインドが次第に好転する一方、輸出にも明るさ。
- (4) 設備投資を牽引する外資流入も再び盛り上がり(図表4)。直接投資は昨年4～6月期やや減少したものの、7～9月期以降、ハイペース。証券投資も趨勢的増勢に。昨年半ば以降の失速が外的ショックに起因した反動効果も加味すれば、同国経済は本年8%前後の高成長持続の公算大。

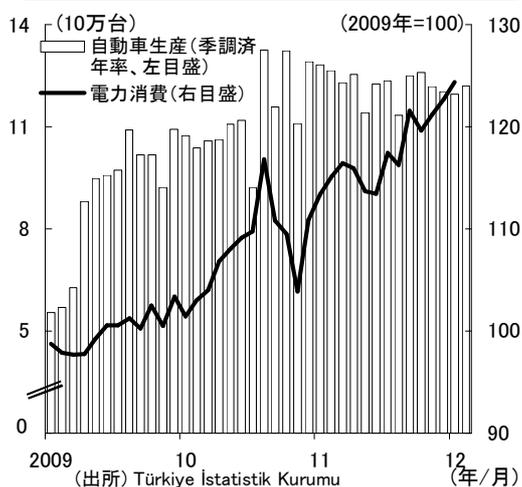
(図表1)トルコの実質経済成長率(季調済年率)



(図表2)小売・サービス業の業況判断DI



(図表3)自動車生産台数と電力消費量(季調済)



(図表4)対内対外直接投資とネット証券投資

